

こごみ 日和 63

特集：いつでもみんなが集える場所に！
～京丹波町、旧質美小学校が生まれ変わり、愛される理由～

ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」：
KES環境機構さん

グリーンキーパーがゆく：地域社会から太平洋の国々まで
世界中が学びのキャンパス
フェリス女学院大学エコキャンパス研究会

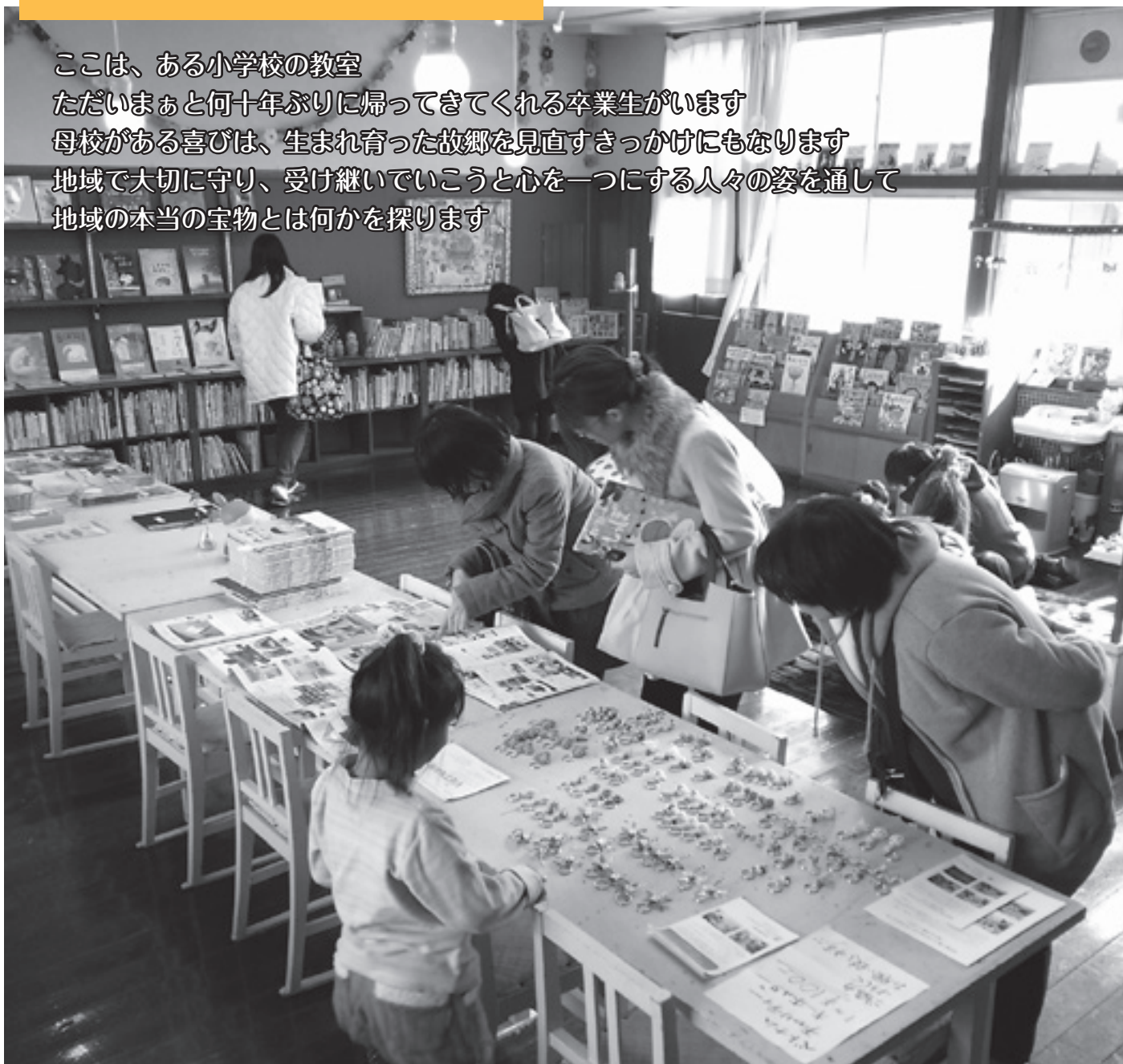
コラム：これっているかしら？
トレーのプラスチックのふた

なごみ日和：KBS京都 アナウンサー 海平 和



地域活動レポート：～地域ごみ減施設見学会～
ごみゼロや資源循環など、民間企業等での優れた取組の現場を見学

ここは、ある小学校の教室
ただいまあと何十年ぶりに帰ってきてくれる卒業生がいます
母校がある喜びは、生まれ育った故郷を見直すきっかけにもなります
地域で大切に守り、受け継いでいこうと心をつなげる人々の姿を通して
地域の本当の宝物とは何かを探ります



旧質美小学校内「絵本ちゃん」(写真 谷文絵)

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

🔍

🔍

特集

いつでもみんなが 集える場所に! ～京丹波町、旧質美小学校が 生まれ変わり、愛される理由～



JR山陰本線・下山駅からバスで約10分、府道447号線沿いに旧質美小学校の木造校舎が見えてきます。その素朴な佇まいに誘われて足を踏み入ると、木製の靴箱や黒光りするほど美しい廊下、タイル貼りの水場など、自身が小学生だった頃を思い出す、懐かしい風景が広がっています。校舎は当時のまま残されており、古い掲示板や理科室などの教室案内が今でも大切に使われています。

僕らの小学校を残したい!

質美小学校は、児童数の減少に伴い近隣地区の小学校と統合することになり、2011年3月に閉校しました。閉校の1年前からは、質美地域振興会（以下、振興会）によって小学校閉校後の諸問題を検討する委員会が発足、長年親しんできた小学校を活用するのか、取り壊すのか、活発な議論が交わされました。しかし、具体的な活用計画も決まらず、ただただ校舎が放置される恐れがありました。「とにかく何かを始めよう!俺たちがやろう!」と振興会代表

の高橋弘さんが各地区の代表や公民館員、農業団体、老人会やPTAに声を掛け、皆が一丸となって、質美の財産である小学校の今後の在り方を考えました。高橋さんは、「まだまだ使える校舎を、何の計画もなく取り壊すのは納得がいかなかった。地域の人たちが集い、新しい文化や人々との交流が生まれる場所にしたかった」と、当時を振り返って仰いました。



高橋弘さん

「絵本ちゃん」と 「喫茶ランチルーム」が開店

振興会の熱意が実り、質美小学校の閉校から約1年後、絵本のお店「絵本ちゃん」と、小学校の給食室を活用した「喫茶ランチルーム」が開店しました。「絵本ちゃん」代表の谷文絵さんは、「赤ちゃんを連れてお母さんが、ゆっくり絵本を手に取り、子どもに読んであげる場所があったらいいなとずっと思っていました。また、質美地域は自然に恵まれているので、子育てやもの作りをするために他府県から来られた方もいらっしゃるんです。そんな方々が集える場所ができたらいいなとも思っていました。」そんな時、質美小学校の閉校が決まり、高橋さんをはじめ、振興会の皆さんから「是非『絵本ちゃん』を実現させよう」と、背中を押してもらったといいます。

もう一つのお店「喫茶ランチルーム」は、子どもたちが毎日給食を食べていた頃の設備をそのまま利用し、温かい雰囲気のお店を実現。喫茶に必要なコーヒーカップなどは、

ランチルームの運営メンバーや友人からの寄付で賄っています。運営メンバーの一人、大西明美さんは、「振興会で校舎の活用を検討していた時に、すぐに地元の人たちが、自分たちの地域のためにやろうと立ち上がりました。閉校後も、こうして毎週小学校に来られて嬉しいです。」と語って下さいました。このランチルームでは、地元で採れた食材を中心に使用し、週替わりのメニューは季節やその時々々の食材によってメンバーで相談をしながら決めていくそうです。「ここを巣立った子どもたちは、この小学校が今も使われていることで、遠く離れていても力を貰っていると思いますよ。」子どもたちの成長を支えてきた食堂は、今でも食を通して、地域の憩いの場として愛されています。



谷文絵さん

個性なお店が続々

現在では、「絵本ちゃん」と「喫茶ランチルーム」以外にも、魅力あるお店が続々とオープンしています。カフェ「Fudoki」代表の浅田容子さんは、陶芸家であるご主人が作った温もりある食器を使って、ほっと一息付けるカフェを運営しています。お子さんも5年生まで質美小学校で学び、「運動会や発表会も地域の皆さんと一緒にというのが、この地域の良いところですよ。」と教えて下さいました。道楽ルーム「みちくさ」には、代表の細井義数さんが20代から集めたという自動車のプラモデルや、手入れが行き届いた自転車など、数々の懐かしい品が並んでいます。「僕が若い頃は、物がなかった時代だったから、自転車とか軽自動車への憧れが強かったです。」リクエストに応じてレコードをかけながら、お客さんと語らう時間は最高です。アンティークを扱う「ケセラセラ」代表の澤田紗夕莉さんは、お隣の

綾部市在住。「絵本ちゃん」の噂を聞いてこの小学校を訪れ、ここに念願のお店を構えることに。「古い小引き出しや食器など、若い人たちは用途も工夫して使ってくれます。まだまだ使える、味のある道具の魅力を伝えていきたい。」と目を輝かせます。窯焼きピッツァ&給食ランチの「pandozo cafe (ぱんどーぞ カフェ)」は、本格的なピッツァやパスタなどが食べられると人気のお店。代表の細見健さんは全国の美味しい物を食べ歩き、メニューや食材へのこだわりは人一倍。奥様はパン職人で、ピッツァの生地はもちろん自家製。元々、近くにパン屋さんを構えていましたが、質美小学校を訪れる人々がゆっくと滞在でき、お腹も心も満たされる場所があればと願い、2014年4月にこのお店をオープンしました。「おかきの加工所」の代表、小林光枝さんは京丹波町在住で南丹市出身。幼い頃、母が作ってくれた懐かしい「おかき」の味を今に伝えています。原料のもち米は地元産。紫芋や黒豆、黒米、青のりなど、目にも鮮やかなおかきには多くのファンがいます。

さらに愛される場所を目指して

どのお店にも共通するのは、旧質美小学校の良さを活かしながら、地元の宝を紹介している点ではないでしょうか。高橋さんは、「どのお店も我々の想いを理解し、一生懸命質美を盛り立ててくれています。今では、町からも近隣の市町村からも「質美には、旧質美小学校という宝がある!」と上々の

の評判をいただいています。」また、全国的にも、閉校となった校舎の有効活用例として注目が集まり始めています。一方で、住民や訪れるファンの高齢化は避けられません。交通が不便なため、車に乗れなくなった利用者は、満足に小学校を訪れることができなくなるという課題もあります。「現在、校舎のバリアフリー化にも取り組んでいます。」と高橋さん。どの世代にも気持ち良く利用してもらえる、旧質美小学校の静かな改革はこれからも続きます。



カフェFudoki

道楽ルーム みちくさ

古道具・アンティーク ケセラセラ

pandozo cafe

おかきの加工所

○絵本のお店「絵本ちゃん」▶月・水曜日定休（臨時休業有）10:30～17:00
Tel: 090-2705-8622、 E-mail: ehon@kyoto.zaq.jp
※お越しいただく際は営業日時を予めご確認ください。

※絵本ちゃんの隣には、絵本を自由に読める絵本の図書館「きのこ文庫」を併設しています。
○「喫茶ランチルーム」▶土曜日のみ営業 11:30～15:00（食事は14:00まで）
○その他のお店の詳細については、京丹波町観光協会ホームページhttp://www.kyotamba.orgをご覧ください。

旧質美小学校（質美笑楽講）管理運営事務局

〒622-0332 京都府船井郡京丹波町質美上野43 旧質美小学校内 代表：高橋 弘 (080-6102-9731)

松村香代子（平成27年2月7日取材）



京都の伝統文化を未来へ 生物多様性に取り組む 特定非営利活動法人 KES 環境機構

写真：公益財団法人 京都市都市緑化協会

数年後、京都市に緑をたたえた和の花ゾーンが誕生するかもしれない。
KESが核となり生物多様性を軸にした環境活動が未来の夢に向かって走り出している。

京都を超え、全国から支持 KESの手軽な環境規格

KESは2001年、京のアジェンダ21フォーラムによって「京都・環境マネジメントシステム・スタンダード」として規格の初版を発行。国際的な環境規格であるISO14001が、1996年(平成8)に発行され、日本で旋風を巻き起こしているところであった。1997年(平成9)京都市で開かれたCOP3では京都議定書が採択され、持続可能な社会の構築への機運がいきなり高まりをみせ、大企業を中心にISO認証取得が必須となり、企業間の取引に欠かせない条件とさえ言われるようになっていた。

だが、中小企業にとって、認証取得は容易ではない。そこで、ISO14001の基本はそのままに、中小企業が多い京都の実情

に即した環境規格として、KESが生まれた。シンプルであり低コストという、KESが設けた規格は、支持を集める。京都という地域の枠を超えて全国に広がり、2007年に特定非営利活動法人KES環境機構として独立。現在の登録は、全国で4,500件(2015年2月末)を超えている。業種も製造業を中心に、販売・卸売り、サービス業、行政や学校関連と幅広い。



夢を語る 津村昭夫専務理事

環境問題は止まらない 生物多様性も活動に取り込む

省エネ、3Rやごみ減量、グリーン調達などの多角的な分野で目標を設け、審査員が指導のうえ、環境改善活動を行い、審査登録事業を展開していたKES。登録事業者の前向きな取組もあり、全体でCO₂削減効果を上げるなど、一定の成果を上げ、社会的にも評価を得てきた。しかし、見渡せば渦巻く環境問題。時代の目は*生物多様性という新たなテーマに向けられていく。地球を構成する種の絶滅、里山などの生息環境の荒廃、外

来種の侵入による生態系のかく乱など課題は多角的だ。1995年以降、国家戦略の策定後、生物多様性基本法など法律が整備され、COP10 [生物多様性条約 第10回締約国会議] が、愛知県名古屋で開催されて以降、動きが活発化している。CSR(企業の社会的責任)の一環として推進する事業者も少なくない。

*生物多様性とは 生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは40億年という長い歴史の中で、さまざまな環境に適応して進化し、3,000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。生物多様性条約では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとされています。

伝統文化や生態系を1鉢の力で守る

生物多様性に向けての取組が緊急課題となり、京都市も動き出す。2014年(平成26)「京都市生物多様性プラン」を策定。京都の暮らしや文化を支える生態系や生きものを守ることを目標に掲げた。それに協働する形で動き出したのが「KESエコロジカルネットワーク」というプロジェクトである。もともと京都の伝統文化は、生物多様性との関わりを軸に営まれ、継承されてきた。葵祭とフタバアオイ、祇園祭とヒオウギやチマキザサ、五山の送り火とアカマツ。これらの行事は、植物なくして営めない。しかし、生息地の変化に伴い、伝統行事で重要な役割を担う植物たちには絶滅の危機が迫っている。

KESは、伝統文化を支えてきた植物に着目し、京のアジェンダ21フォーラムや京都市都市緑化協会等の協力を得て、2014年6月、鉢植えでの栽培を進める取組に乗り出す。

これに先立ち、京都駅ビル開発で展開していた「緑水歩廊」と、梅小路公園の「いのちの森」の間を、「緑の回廊ネットワーク」として繋げようということになった。「緑水歩廊」は、開放



育成実習風景

広がれ！緑の輪 京都市全域に

南消防署だけではない。1鉢はそれぞれにエピソードを咲かせた。「職場の空気が和やかになった」「自然を見る目が変わった」などの感想が、参加事業者からKESに届いている。

そんな中、京都市は、伝統文化を育んできた固有の生態系の保全・再生のための活動を支援する「京(みやこ)の生きもの・文化協働再生プロジェクト」と称する認定制度を創設。その第3号としてKESは、2014年(平成26)10月に認定を受け、事業推進の意義を確かなものにした。

2015年、KESはエコロジカルネットワーク事業をさらに拡大展開。京都市内で登録事業者1250団体のネットワークを活かし、フタバアオイ、フジバカマ、ヒオウギ、キクタニギクの鉢植えによる育成に取り組む。今年度は、100団体の参加を

的な階段を利用した雨水などの循環システムによって、京都ゆかりの植物を植栽し、ビル施設に緑の空間を設けたもの。「いのちの森」は、自然の生態系を復元した9000平方メートルの自然空間。それを和の花の鉢植えて繋げる「緑の回廊ネットワーク」の具現化に向け、周辺のKES登録事業者約50団体にフジバカマとフタバアオイの育成を呼びかけた。フジバカマはKBS京都など、フタバアオイはNPO法人葵プロジェクトが、すでに保全に取り組んでいたからだ。18団体がこれに参加し、育成実習を受け、鉢植え栽培を行った。

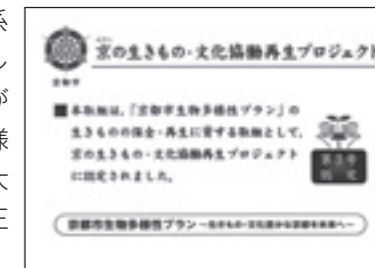
鉢植えとはいえ、植物は不思議な力を持つ。参加事業者としてフジバカマ1鉢を育成していた京都市南消防署には、思いがけない成果が訪れた。署の一角に置かれたフジバカマは9月、淡い紫色の花を咲かせた。そこへ渡り(長距離を移動する)をするアサギマダラという蝶が、このたった1鉢の花を見つけて蜜を吸いに飛んできたのだ。日々、緊張を強いられる消防職員たちからは、優美なアサギマダラの姿に「緊張がほぐれた」などの声が上がったという。



京都市南消防署のフジバカマ

目標に掲げ、新たな参加団体を募集中だ。

KESは今、エコロジカルネットワークを核に、未来に向け構想を描いている。「この動きが京都市全域に広がり、事業所、学校の敷地内での育成や緑化運動となれば…」とKES専務理事の津村昭夫さんは夢を語る。「緑の回廊ネットワーク」を軸に、伝統に根ざした生態系が創成され、東山を包含し隣県へと緑のゾーンが広がれば」とも話す。生物多様性という難題は、同時に大きな夢も運んできた。真正面から立ち向うしかない。



京(みやこ)の生きもの・文化協働再生プロジェクトの認定証

「京都市生物多様性プラン」に基づく「KESエコロジカルネットワーク」に参加しませんか。詳しくは、お問合せください。
特定非営利活動法人 KES 環境機構 京都市右京区西京極豆田町2番地 京都工業会館2F 電話 075-321-4767
<http://www.keskyoto.org/> E-mail : kes-ems@keskyoto.org

◆フジバカマ(藤袴)：キク科の多年草。京都府レッドリストでは、絶滅寸前種。環境省のレッドデータブックでは、準絶滅危惧種。かつて日本では田のあぜなどに群生していた。万葉のころから日本人に親しまれた。秋の七草の一つ。

◆ヒオウギ(檜扇)：アヤメ科の多年草。山野や海岸に自生する。悪霊を払うお守りとされ、祇園祭の飾りに欠かせない。黒い種子は、「ぬば玉」と呼ばれる。和歌では「黒」「夜」にかかる枕詞。

◆フタバアオイ：ウマノスズクサ科の多年草。賀茂神社で冠帽に葵桂を飾る。葵はあひひ=日向(太陽・別雷(わけいかづち))に通じ、牛車、棧敷、社前に飾る。徳川家「葵の御紋」の基。カモアオイとも呼ばれる。日本の固有種。いくつかの県では絶滅危惧種等に区分。

◆キクタニギク：キク科の多年草。東山を流れる菊溪川の河川敷に自生していたことが、和名の由来。現在は、環境の変化で東山での自生は確認できていない。晩秋に小さな黄色い花を咲かせる。

森田知都子(平成27年2月4日取材)

地域社会から太平洋の国々まで 世界中が学びのキャンパス

いつもの京都市内とはどこか違う、閑静な風景が広がる横浜市。駅を下りて少し坂道を登ると、そこには力強く回る赤い風車が見えていました。今回は、全国的にもエコキャンパスとして名高いフェリス女学院大学を訪問し、同大学のエコトップランナーである「エコキャンパス研究会」の皆さんにお話を伺いました。

フェリス・エコキャンパス

2009年に、エコ大学ランキング調査において、全国の私立大学1位に輝いたフェリス女学院大学！キャンパス内には風力発電やピオトープなど、いたるところに環境への取組が見られました。同大学では、このエコキャンパスを地域へ開放し、地域社会への環境学習にも力を入れています。



キリバスの民族衣装をまとった佐藤先生（同国での環境研究・環境活動の第一人者）



フェリス女学院大学ホームページから引用

エコキャンパス研究会の挑戦

エコキャンパス研究会・部長の石川葵さんと副部長の酒井莉奈さんに最近の取組について伺いました。親子でエコを学ぶ「親子講座」や地産地消をテーマにした「フルーツキャンパス」、食品循環システム「ヤサイクル」の推進など、どれもユニークで楽しそうな活動ばかり！そして今、ごみ削減を目標に、特に力を入れているのがマイボトル向け飲料自販機「パトル (Pattle)」の導入。大学のロゴが入ったかわいいタンブラーは学内外に関わらず大人気で、大学祭では毎年、即完売！これに注目し、タンブラー専用自動販売機を学内食堂に設置しました。使えば使うほどドリンクの値段は安くなるのか！



インドネシアの子供たちとのふれあい

京都光華女子大学 環境ボランティアサークルグリーンキーパー（平成27年1月26日取材）

世界を知り、自分を磨く

沈みゆく島、森林伐採、ごみの散乱、これらは日本にいとなく実感のわかない地球規模の環境問題です。同研究会メンバーはこのような問題に直面する現地を訪問し、環境問題解決に向けて取り組んでいます。昨年夏にインドネシアを訪れた石川さんは、ここで、農業と林業を両立させた「アグロフォレストリー」について学んでこられました。「自然のために生活が犠牲になったり、人間のために自然が犠牲になったりするのではなく、自然と人間が共存できる社会が必要」と、その目には世界を見て成長された石川さんの使命感が感じられました。

徹底的に現場主義

最後に、エコキャンパス研究会顧問で国際交流学部教授の佐藤輝先生に環境教育のモットーについて尋ねると「徹底的な現場主義！環境問題は座学だけではなく、実践と経験で学んでいくもの。環境教育に携わるものとして、多くの学生に環境問題を肌で感じてほしい。」と力を込められました。佐藤先生の見守るエコキャンパス研究会は、世界中を学びのキャンパスとして活躍の場を広げていきます。



パトル導入を推進する同研究会の酒井さん（左）と石川さん（右）

なごみ日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●●第5回 たけうま全国大会●●

京都、向日市でたけうま全国大会というものが行われているのはご存じでしょうか？今年も1月25日に行われ、既に13回目。実は、私もこの3年、毎年出場しており、今年、ようやく…3年目の正直で、ずっと達成できなかった竹馬障害物競走「サスケ」を完走することができました！やはりどんなことでも、そしていくつになっても、できなかったことができるようになるというのは嬉しいものですね。



向日市の特産品「竹」。竹の径、広がる竹林の景色はとても美しいです。そのPRとしてはじまったこの大会は、多くのつながりを結んでいます。竹馬は昔からある遊び、私も小学校の授業で練習したのを覚えています。ですが、今では遊んだことがないという子どもも増えているそうです。そんな中、この大会では大会前に、

親子竹馬教室というものが、親子で簡単に竹馬を作ることができるのです。笑い声であふれるグラウンド。そして大人に持ってもらいながら乗る練習や、竹馬に乗るのが得意なおじいちゃんがお孫さんに自慢げに教えている姿も。本当に幸せそうな笑顔でした。



そしていよいよ大会へ。30m走からスタート。親子で1歩1歩、初めての竹馬で一生懸命ゴールを目指すかわいいお子様選手。去年より少しでも早くと意気込む選手。そして4秒後半から5秒台でゴールする竹馬名人親子。それぞれの楽しみ方で盛り上がり。そして私も「サスケ」へ。竹馬でタイヤの中を進み、サッカーボールをシュートしたりしながら最後は砂場をざくざくと。過去2年の悔しさを知っている、他の参加者の方からの大きな声援と、ゴールした時のおめでとうの言葉、徐々に思いっきり喜びはねて喜んでしまいました。向日市を盛り上げたいというあつい気持ちの商工会議所青年部のみなさん、そして全国からあつまる竹馬ファン、それ以上にこのあたたかいたけうま全国大会のファンのみなさんで、年々盛り上がりは増えています。子どもから大人まで一緒に楽しめるのも大きな魅力、ちなみに私の先生は74歳の男性で、「竹馬がやっぱり好きだ〜」と笑ってらっしゃいました。みなさんもぜひ来年参加してみませんか？

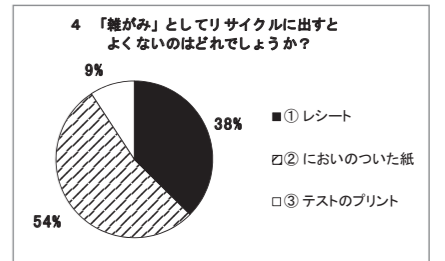
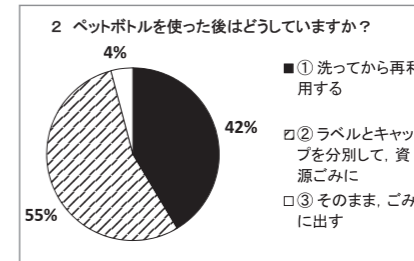
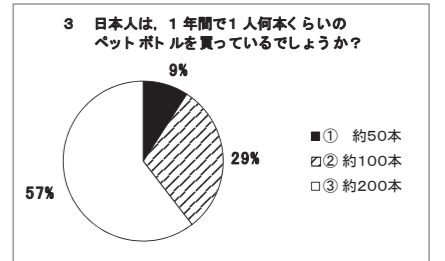
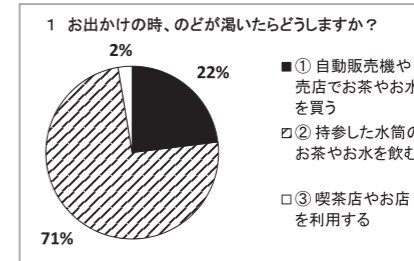
海平 和：京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」、ラジオ「森谷威夫のお世話になります」などに出演中。

ごみ減 活動報告 ◆『ごみ減量啓発アンケートクイズ集計結果』

当会議では、京都市ごみ減量めぐくん推進友の会と協働で、年に15回程度、イベントにてごみの減量啓発活動を行っています。その際に行ったアンケートクイズの集計結果をご報告します。

皆さん、エコの意識が高く、お出かけでは水筒持参、ペットボトルは正しく分別している方が多かったです。1年間のペットボトルの本数については、勘で正解の方も多く、答えを聞いて、驚いていました。リサイクルできるとはいえ、エネルギーも多く使われますので、水筒持参がもっともっと広まるとうれしいですね。

3の正解は③、4の正解は①と②です。



これって、いるかじ？

第8回

トレーのプラスチックのふた

最終回

ずいぶん前からスーパーの総菜や刺身売り場で増えたアレ。おかげで私の家のプラスチックごみも増える一方。そう、あのトレーにつけてある「プラスチックのふた」です。確かによりおいしそうに見えなくもない。でも、近くのスーパーの何がおいしいかくらいは、みんな知っていますよね。ラップでいいのになあと思うあなた、ぜひスーパーにそのことを伝えましょう！

（事務局 齋藤友宣）



▲ラップでぐるぐる巻くよりも全体で2倍以上重いこと。

このコーナーは今号で最終回です。これからも「これをやめれば、ごみが減るよね」とツッコミを入れながら暮らしてみてください！ありがとうございました！

ごみゼロや資源循環など、民間企業等での優れた取組の現場を見学

2月13日（金）、当会議主催の施設見学会を開催しました。今回の見学先は、ごみゼロに取り組む「キリンビール滋賀工場」と、地域ぐるみで資源循環を進める「あいとうエコプラザ菜の花館」。当日は、時折雪が舞う寒い一日となりましたが、市内各地域でごみ減量の活動をしている地域ごみ減量推進会議と京都市ごみ減量めぐくん推進友の会から、総勢41名と多くの方が参加されました。

工場で出る廃棄物のリサイクル率100%

最初に訪れたのは、滋賀県多賀町にあるキリンビール滋賀工場。2010年春にリニューアル工事を完了した新しい設備を備えた工場で、ビールの仕込みからパッケージングまでの製造工程を見学しました。原料の麦芽やホップに直に触れたり、発酵前の麦汁の試飲、展示物や3D映像を交えた説明を聞きながら、品質へのこだわりや環境への取組を学びました。



キリンビールでは、全国にあるすべての工場で“完全再資源化”を実現しています。例えば、製造工程で出るしぼり粕は牛の飼料やきのこの培地に、余剰酵母は健康食品の原料に、ラベル粕は段ボールや再生紙の原料に、王冠栓は製鉄原料に……という具合に、工場内で出る廃棄物をすべて何らかの形で再利用しているとの説明に、驚きの声が上がっていました。また、容器包装の軽量化をはじめ、ダンボール箱の角をとって紙資源を削減するなど、ごみ減量のためにさまざまな工夫を凝らしており、キリンビール全体でCO₂排出量は1990年時点の40%削減に成功しているとのこと。参加者からは「全部リサイクルして廃棄物が出ないのは素晴らしい」、「徹底した環境への配慮に感動した」などの声が聞かれました。

地域内完結をめざす 資源循環システム

午後から向かった先は東近江市の愛東地区（旧愛東町）。いまや全国に広がる資源循環システム「菜の花プロジェクト」の発祥の地で、その拠点となる施設が「あいとうエコプラザ菜の花館」です。菜の花エコプロジェクトとは、菜の花を栽培し、収穫した菜種から油をとって地産地消を進め、油かすは肥料に。また、廃食油は回収して、粉せっけんやバイオディーゼル燃料（BDF）にリサイクル。BDFは



公用車などに使われ、地域内で資源が循環するしくみです。

菜の花館の中には、せっけんプラント、燃料プラント、

資源回収場などがあり、廃食油から粉せっけんを作る工程や、菜種から油を搾って精油する工程を見学しました。施設内には、未利用バイオマスを炭化するプラントもあり、もみ殻を炭化して作った「もみ殻くん炭」は、育苗床土などに活用。炭化の過程で出る排熱も施設の熱源として利用しているとのこと。参加者の中でも特に男性は、自然エネルギーへの関心が高く、BDFを精製するプラントなどを興味津々で覗き込み、熱心に質問をする姿が見られました。女性参加者には、リサイクルせっけんが興味深かったようで、色や匂い確かめ、活発に意見を交わしていました。見学後は、「循環型の取組は素晴らしい」、「捨てるものなしで、よく考えられている」、「地域全体で取り組んでいるのが良い」と感心しきりでした。

今後のごみ減量活動の励みに

最後に、地域活動実行委員会の山内寛委員長より「この施設は、愛東町時代に琵琶湖の水が汚れた



ことに端を発し、官と民が一体となって手作業から始めたリサイクル事業です。身近に実感できる資源循環の地域モデルとして、学ぶべき点がたくさんありました。京都市でも引き続き廃食油の回収や、昨年10月から始まった雑がみの回収など、活動の輪をどんどん広げて行きましょう」と挨拶がありました。参加者からは「リサイクルの必要性をもっと呼びかけていきたい」、「石鹸作りを多くの人に知ってほしい」、「廃食油の回収をさらにがんばっていく」などの声が相次ぎ、これまでの取組をさらに発展、拡大していく大きな励みとなったようです。

▶キリンビール滋賀工場

<http://www.kirin.co.jp/entertainment/factory/siga/>

▶あいとうエコプラザ菜の花館

<http://www.city.higashiomi.shiga.jp/nanohanakan/>

藤原幸子（平成27年2月13日取材）